

誠実・パワフル・心豊かな府大卒業生

学 長 竹葉 剛

卒業生のみなさん、卒業おめでとう。皆さんが本学で、講義や演習、実験や調査、そして卒業(修士)論文の作成に向けて頑張ったことは、人間の基本的な能力として皆さんの中に残っています。自信を持って社会での新しい課題に挑戦してください。

本学は、その前身の設立から数えますと今年度で111年目となり、現在約2万人の先輩が社会で活躍しています。昨年の11月、その中の一人、曾根恵子さんが本学に帰ってきて講演をしてくださいました。曾根さんは1977年女子短期大学部国語科卒業、現在は株式会社資産相談センターの代表取締役です。学生時代はバレーボール部所属、世話好きで文章を書くのが得意だったという曾根さんですが、卒業後環境が変わる度に「熱意を持って取り組めば願いはかなう」の信念で、各種資格の取得、会社設立と奮闘し、日本初の「相続コーディネーター」を誕生させました。



曾根さんは言います。「この仕事はお手本がなく、自分で新しい職業分野を切り開いてきたと自負している。女性だから、結婚しているから、子どもがいるから、資金がないから、経験がないから、前例がないから、このような課題が進むための壁になると感じたことはなかった」。現在では取扱資産総額500億円の社長さんで、著書も10冊を超えます。詳しくは同窓会会誌「SaKuRaさくら」Vol.9をご覧ください(同誌には、毎号多くの府立大学卒業生の活躍が紹介されています)。曾根さんの講演を聴いていて、この人は確かに府立大学の卒業生だと強く感じました。誠実で、パワフルで、そして非常に心豊かに活躍しています。

今年卒業される皆さんが出て行く社会は、社会の仕組みや価値観など、今後めまぐるしく変わっていくと予想されます。自分を何かの枠に入れて縮んでしまうのではなく、社会環境の変化に合わせて、自分をのびのびと成長させてください。皆さんの中には、まだ誰も知らない大きな能力と可能性が隠されています。それをじっくりと育ててください。

ただし、あまり私生活主義に陥るのはよくありません。現在の日本社会には、少子化、様々な家族問題、ワーキングプア・格差問題、年金や医療費の問題、近隣諸国や欧米との関係、環境問題など多くの課題があります。これらの課題をどうすべきか、社会の一員として関心を持ち、その解決の方向について考える責務があります。

また、特に健康には気を配ってください。バランスのとれた食事と十分な睡眠が大切です。朝起きた時に夜眠くなる時間が決まるのが人の身体リズムです。その眠くなる時間にぐっすり眠ることにより、免疫力が回復し風邪を引きにくくなります。

皆さんの活躍を期待しています。

目 次

卒業生に贈る言葉	1	退職教員からのメッセージ	13
部局長の言葉	2	公開講座のお知らせ	16
担任・卒業生のことば		西安交換教員からのメッセージ	17
文学部・文学研究科	3	大学改革の取組	18
福祉社会学部・福祉社会学研究科	6	学位(博士)取得者一覧	20
人間環境学部・人間環境科学研究科	7	大学ホームページ	20
農学部・農学研究科	10		

部局長のことは



「I believe」で人生の勝利を

教務部長 久保 康之

ご卒業、おめでとうございました。歌手、絢香さんの「I believe」という歌に「I believe myself 信じることですべてが始まる気がするの。I believe myself あたたかい光はまちがっちゃいない。歩いていこうI believe」とあります。大変に勇気づけられる歌です。

はなむけの言葉として、この歌のメッセージに通じる私が気に入っている箴言を二つ紹介致します。「思うに、希望とは、もともとあるものだともいえぬし、ないものだともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には、道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」魯迅『故郷』、「悲観主義は気分属し、楽観主義は意思属す」アラン『幸福論』。どちらも経験に根ざした含蓄のある言葉です。

新たな世界への出発にあたり、希望と不安が交錯していると思います。皆さんは大学生活の4年間でかけがえのない蓄積をされたことと思います。強い意志で社会での勝利の栄光をつかまれますことを期待します。

弥生、3月、旅立ちのとき

学生部長 宮嶋 邦明

卒業生のみなさん、いよいよ旅立ちのときですね。加茂川、植物園、そして比叡をのぞむ抜群の環境のもとの、みなさんの大学生活はいかがだったでしょうか。十分に満喫したという人も、もう少しいたかったという人も、いよいよ今日でお別れです。緑と土と、そして心やさしい人々に囲まれての大学生活は、みなさん方にとって、何ものにもかえがたい財産になったと確信します。

旅立ちに際し、講義の中での1節を贈ります。「子どもは歩くことをおぼえると転ぶことをおぼえ、ただ転ぶことによってのみ歩くことをおぼえる」。これは人間の成長過程を貫く基本原理です。転ばない限り、本当の意味で歩く力を獲得することはできません。失敗を恐れず、その時々を、どうか、思う存分、そして誠実に、生き抜いてください。みなさん方の前途に幸多かれと祈ります。

卒業（修了）生のみなさんへ

附属図書館長 野間 正二

卒業（修了）おめでとうございました。

所定の単位を無事に修得されて、この式に出られた

ことはまことにめでたいことです。ご両親もホッとされたことと思います。これもめでたいことです。

でも、何よりもめでたいのは、卒業（修了）生が新しい門出にのぞまれているという事実です。新しいスタートラインに立っていることです。新しい世界への旅立ちは、どんな場合でも、めでたいものです。全世界の祝福を受けてしかるべきものです。

なぜなら、新しい世界は未知の世界でもあるからです。未知の世界に飛びこむには、勇気がいります。その勇気は、まわりの人々に祝福されれば、さらに湧いてくるものです。そして未知の世界に飛びこみ、自分の能力をさらに発揮してこそ、人生はさらに豊かなものになるのです。

この卒業（修了）式はその豊かな人生のための出発点です。新しい始まりのための、ひとつの終わりのなのです。けっして終わりの始まりではありません。そこでもう一度、卒業（修了）おめでとうございました。

卒業おめでとうございます。

事務局長 山崎 達雄

卒業おめでとうございます。府立大学で学ばれたことを基礎に、社会人として目標を定めて歩んでください。期待しています。

社会人としての生活は、学生時代と違って、少し窮屈かもしれません。仕事をはじめ、人との付き合いなど、自分の意に反することもあるかもしれません。悩んだりすることもあると思います。これも、自分が社会の中で成長する一つの段階と考えて、何事も前向きに取り組んでください。

それでも苦しい時があれば、今は、「峠の坂道」を登っていると考えてみてください。急峻な山道であれば別ですが、なだらかな「峠の坂道」に、自分が挑戦していることはなかなか分からないものです。「峠の茶店」では少し休んで、周りを見渡し、いま来た道を振り返るのも、疲れを癒す一つです。そんな時、母校の下鴨の地を訪れ、恩師や後輩と話をするのも良いと思います。きっと何か得るものがあります。母校とはそんなものです。先生はもちろん、事務局職員一同も大歓迎です。

最後に、何事も学ぶ心と、自分を楽しむ遊び心も忘れずに、健康に気をつけて、元気に御活躍ください。卒業生の方からの便りが届くことを待っています。

文学部・文学研究科

ダークマター

文学部長・文学研究科長 渡辺 信一郎

卒業生の皆さん、卒業おめでとう。この二年、あるいは四年間をふりかえてみて、いかがでしたか。卒論・修論を仕上げたわけですから、ある程度の達成感はあるはずですね。学問の楽しさは、一つ分かったと、そこからまた分からないことが出てくることです。分からないことだらけで、ついに止められなくなってしまいます。最近、ダークマター（暗黒物質）というモノがあることを知りました。宇宙の大半を占めているにもかかわらず、何モノなのか、まだ分からないといえます。人間は、この世界のほんの少ししか、認識できていないのですね。これは実に楽しいことで、世の中には、知るべきことが山ほどあるのです。この二年間・四年間の達成を基礎に、未知の世界を歩みつけてください。さようなら。

ご卒業おめでとうございます

文学科国文学・中国文学専攻担任 林 香奈

本当にいろいろなことがあった四年間でしたね。今日、無事に皆さんが卒業を迎えられることを、たいへん嬉しく思っています。最初の中国語の授業で、何を言っても笑ってくれない皆さんとどうやってコミュニケーションをとっていかうか、頭を抱えたことを今でもよく覚えています。けれども、それは要らぬ取り越し苦労でした。何か問題があればその都度みなさんがお互いを心配して、いろいろな相談を私にしてくれたことには本当に感謝しています。すでに新しい道を選択して大学を離れた人も含めて、担任教員として私をはじめ受け持った皆さんの今後のご活躍を心よりお祈りしています。どうぞお元気で！

人生の財産です

文学科国文学・中国文学専攻 R. H.

あっという間の四年間でした。人生でこんなに早く過ぎた時間はない、と言っても過言ではありません。そのように感じた私の大学生活は、何とも充実したものでした。

先生方のご指導は、専門に対する熱い思いが学生の心に響き、そこから学生が自分なりの熱意をもって己の課題に取り組めるものでした。

まだ慣れない演習室で、資料を探し右往左往していると、声をかけて手伝ってくださる優しい先輩方もおられました。また、至らない所が在れば叱咤激励し、悩んだ時にはアドバイスをしてくれる、良い友人にも出会えました。このような環境において体験できた諸々の出来事は、どれも私にとってかけがえのないものとなりました。

この大学、この専攻に来なければ過ごせなかった自分の四年間は、私の人生の財産だと自然に思われます。国中文、万歳！

カーテンコールの後に

文学科西洋文学専攻担任 佐々木 昇二

卒業おめでとう。今日の皆さんはさしずめ、芝居の上演が終わって出演者一同勢ぞろいして舞台前方に一列に並んだというところでしょうか。存分に役を演じきった人の他に、中には台詞をとちってしまった人や出番を間違えた人、あの場面はああすべきだったとか、あるいは、とにかく舞台上に立てて嬉しかったという人など、思いはさまざまに違いないはずなのに、みんな一様に晴れ晴れとした表情をしてくれる。私はこの瞬間がたまらなく好きである。しかし、しつこく拍手を続けて皆さんを何度も舞台に呼び戻して上演の余韻に浸り続けることも許されませんし、同じキャストによる再演は残念ながらもうありません。でも、ひょっとしたら近頃流行のポストパフォーマンス・トークが将来実現するかもしれない。そんな思いを込めて、客席からもう一度だけ拍手を送ります。

4年間を振り返って

文学科西洋文学専攻 A. G.

平成15年4月8日、降りしきる雨の中、不安と希望・期待が錯綜した、複雑な面持ちで京都府立大学の正門をくぐった入学式の日から早4年の月日が経とうとしています。振り返れば、長いようであっという間だった4年間は、本当に毎日が濃密かつ充実しており、小学1年生から始まった私の16年間の学生生活を締め括るに相応しい有意義な日々であったように思います。素晴らしい先生方、そして仲間に恵まれて実りの多い価値ある大学生活を送れたことに心から感謝すると共に、4年間の大学生活の中で改めて知り得た“学ぶことの楽しさ”と“弛み

ない努力の重要性”を忘れることなく、大学を卒業して社会に出た後も常に探究心・向上心、そして堅固な意志を持って日々精進に努めていきたいと思っています。4年間お世話になったたくさんの方々、本当に有難うございました。

史学科卒業生の皆さんへ

史学科担任 河村 貞枝

ご卒業おめでとうございます。四年前の春、新歓合宿旅行の親睦会で、新入生の担任の私は、四年後に京都府立大学と一緒に「卒業」しましょうとあいさつしました。四年間の時の流れは本学の近未来に向けて大きな変革のうねりを伴っていましたが、皆さんと私が(退学の事情聴取や留年など不測の心残りも多少ありましたが)、「晴れて」この学舎を卒業・退職していくことは想定どおりとなりました。この年度の史学科生との親交は、私の方に「最後」という思いがあったからでしょうか、学科旅行や卒論指導などさまざまな思い出が感慨深く胸に刻まれております。本当にありがとうございます。皆さんの前途は、決して平坦な道ばかりでなく、時には険しい山坂も激流もありましょうが、希望と勇気として優しさをもって乗り切ってくださいを祈念して、私の饒のことばといたします。

卒業に際して一言

史学科 H. N.

短いもので、もう四年経ちました。入学の頃は、あれやろうこれやろうと毎日いろんな事を思い動いていました。今振り返ると、なんであんなに慌ててたかな?と思うくらい。それがいつの間にか、のんびりしだして、実際は、勉強でもなんでもマイペースで、ボランティアや海外旅行などなど、当初は思いもしなかった道も歩くことができ、おもしろい四年間でした。何かの結果を求めてがつつ前に進むのをやめて、のんびりマイペースでやっていくことは、府大生活の中で自然に得た、大切なモノの一つです。卒論等ものんびり構えていたのを丁寧に指導してくださった先生方、大學にいない期間があっても会うといつでも手を振ってくれた友達、いろいろと「ありがとうございます」を言える相手がありました。

君たちの前に道は出来る

国際文化学科担任 岡村 眞紀子

ご卒業おめでとうございます。卒論執筆の真っ最中

に巣立つ学科がなくなると聞かされた君たち、私の心配をよそに、提出、試問のその日まで、勉強に打ち込み、精一杯の卒論を残した君たち、おかれた立場がどうあれ、自分の為すべきことを、誠意をもって行う、この一事を肅々とこなして卒業していく皆さんに、心からの敬意と祝意を捧げます。このことはあなたがたの人生の中でとても大きな力になるでしょう。そして、そのことが教員の私の力にもなります。敢えて言うならば、君たちの前に道は出来る。君たちの後ろに道はない。君たちの未来に幸あれ。

卒業に際して

国際文化学科 S. T.

府大の国際文化学科で4年間を過ごせて本当に良かったと思っています。素晴らしい先生方、大切な仲間に関われて学んだことは、これからも決して忘れる事はありません。日本文化を学びたいと思って入学した私ですが、日本文化以外の学問にも触れ、その面白さを学びました。国際文化学科でなければ、できなかったことです。また、4年間の集大成である卒業論文で、入学当初からの希望であった『源氏物語』をテーマに取り上げて書くことができたのは、熱心に指導してくださった先生方のおかげです。学生ひとりひとりが先生方の丁寧な指導を受けることができ、とても幸せな環境であったと思います。4年間支えてくださった先生方、仲間たち、家族に感謝したいと思います。ありがとうございました。

身過(みすぎ)は八百八品

文学研究科国文学中国文学専攻担任 藤原 英城

「身過は八百八品、それぞれにそなわりし家職に油断する事なかれ」(『西鶴織留』巻三の四)とは西鶴の言葉。

大学院博士前期課程を無事修了されたみなさんは、身に付けられた高度の専門知識を活かし、実社会へ、あるいはさらに進学へと飛び立たれます。身過ぎはまさに八百八品、何を生業(なりわい)の種としてもこのご時世食うに困ることはないでしょうが、みなさんにとってこれからの新世界が生涯の家職となるやもしれません。ご油断召されるな。

「定めがたきうき世なれば、定まりし家職に油断なく、一とせに一度の年神(としがみ)に不自由を見せぬやうにかせぐべし」(『世間胸算用』巻三の四)。がんばれよ!

卒業にあたって

文学研究科国文学中国文学専攻 H. K.

あっという間の二年間。私の大学院生活は充実したものでした。

学部の時、私は主にサークル活動に熱中し、学生の本分である勉強には熱心ではありませんでした。いざ卒業という時になって、私は国中に入った意味を自身に問い掛け、もう一度勉強し直したいと思いました。大学院入学はなんとか果たしましたが、不勉強な私が周囲のレベルについていくには、人より多くの時間と労力を要しました。そんな私を先生方は温かく見守り、懇切丁寧なご指導を下さいました。また、周りの学生・留学生の皆も良くしてくれました。そのお陰で、私は充実した時間を過ごせ、大学生活の忘れ物を取り戻すことができ、とても感謝しています。

学生生活が終わるのは少し寂しいけれど、今はただ、人生の約三分の一を過ごしたこの愛すべき府大に「ありがとうございます」と言いたいです。

殻は割れた。いざ！

文学研究科英語英米文学専攻担任 野口 祐子

「啐啄」という言葉を知っていますか？『広辞苑』によると「啐」は鶏の卵がかえる時、殻の中で雛がつつく音、「啄」は母鶏が殻をかみ破ることだそう。そこで「啐啄」とは①禅宗で、師家と弟子のはたらきが合致すること、②逃したらまたと得難いよい時機、となる。ここに修了される皆さんの2年間はまさに「啐啄」の時機だったはずだが、思い返せば皆さんとの殻のつき合い、うまく呼吸が合ってたか？う…ん。「啐啄同時」とはいかない時もあったけど、殻は破れましたよね。でもひよこもすぐには飛べません。それに「巣立ちの朝」なんて言うけれど、人間は所詮、地を這う動物。これからの人生、一皮も二皮も（とここから爬虫類の比喻に移って申し訳ない）剥けていかなくちやならない。その節目に来たら、私たち教員にどのあたりをつつかれたか思い出して下さい。きっと役に立ちます。ご卒業おめでとう。啄々。

考え、伝える難しさ

文学研究科英語英米文学専攻 A. T.

六年間の学生生活のあいだ、卒論ではドイツ文学、修論ではイギリス文学と、二つの国の文学を学びました。大学院に進んだものの、専攻の変更不安を感じ、一時は後悔したこともありましたが、しかし、助言を惜

しまない先輩方や細やかな指導をして下さる先生方に恵まれたこと。心から好きな作品と出会い、修論を通してじっくり向き合えたこと。今では自分の選んだ道に納得しています。

もし卒論で得た達成感のまま終えていたら、私は未だに文学の中に一つの答えを求めていたでしょう。文学は無数の目で見られるもの。論文は人の考えを咀嚼したうえで自分の考えを伝えるもの。それに気づき、その難しさに気づいたのは、存分に考えさせてくれる環境があったからです。気長に待って下さった先生、ありがとうございました。

分析し相対化するということ

文学研究科史学専攻担任 小林 啓治

「歴史学の研究は社会に役立つのですか？」。今後みなさんはいく度もこの問いに出会うでしょう。でも、いったい「社会」とは何でしょうか？問う人の問題意識によって、さまざまな解釈が成り立ちます。身近な地域、国、世界、いずれを指すかは文脈によります。ずっと限定して行政や国家を意味している場合さえあります。人々の関係によって織り成される社会を、時間軸によりながら研究してきたみなさんは、「社会」をいったん分析的に解体し、相対的にとらえる方法を学んだことと思います。冒頭の問いが、特定の歴史的・社会的条件のもとで発せられ、また危うさをともなっていることを見抜く力が養われたことを確信して、みなさんの卒業を祝いたいと思います。

「基盤」

文学研究科史学専攻 A. T.

他大学で学部を卒業し、自分の研究を深めるために一人でのりこんだこの大学で、私は多くの人に支えられ、研究とともに、これからの人生にとって必要な主体性や協調性を学びました。それは社会の中で個人として生きるために大切な精神の基盤を整えることであり、つまり「大人」になるということです。おそらく、一定の時期にこの基盤を整えられるかどうかで、今後の社会生活は大きく変わるのでしょう。後輩達からも多くのことを学んだ私は、彼らの人生の基盤整備に手を貸してあげられたのでしょうか。皆がその基盤の上に輝ける未来を築けるような大人になってほしいと思います。

ゆっくりと、自分の人生を

文学研究科国際文化専攻担任 池田 敬子

修了おめでとうございます。修士課程の2年間（あるいは3年間）であなた方の顔がずいぶん引き締まったことに感動しています。それぞれによく勉強し研究し、それにつれて顔つきも話し方も物腰も大人びてきました。学部の演習では、模範となる発表をしてくれ、資料室でも後輩たちにいろいろ教えてくれた様子、ありがとう。修士論文を書くことで、自らの研究・勉強のスタイルもほぼ確かなものになったようですね。

この経験の力を信じ、よい意味での無駄を恐れず、自分の目指す人生を焦らずゆっくりと築き上げて下さい。急いでちょこちょことは禁物、あなたの人生を、あなた独自のスタイルで、ゆっくりと着実に一步一步進まれんことを。

私を変えた府立大

文学研究科国際文化専攻 N. M.

小さい頃から「勉強は嫌い、でも、学校は大好き」という子だった。私が大学院の修士課程を修了することは、少し不思議でもあり、自然なようでもあり…。

今思えば、修士課程に進むことを決めた4回生の頃から、「勉強は嫌い」から抜け出していたのだと思う。人間環境学部・環境デザイン学科から文学研究科・国際文化専攻に移るということもあり、新しい学問に楽しみを感じつつ勉強に取り組んだ。そして、その特異な過程で人よりもより広い視野を持つことができた。修士課程の2年間は、今まで生きていた20数年より、大きく深いものを身につけたのではないかと思う。そして、そのことに対して喜びと充実感を感じている。「勉強も学校も大好き」と言えるようになるための、自然な道のりであり、大切な2年間だった。

福祉社会学部・福祉社会学研究科

「福祉社会」づくりをライフワークに!

福祉社会学部長・福祉社会学研究科長 高原 正興

学部7期生等の諸君、ご卒業おめでとう! 博士前期課程2回生の諸君、修了おめでとう。本学大学院進学以外の方々とはこれでしばらくお別れですね。ところで、今年度は福祉社会学部創立10周年という記念すべき年でした。そして、学部7期生が学んだ4年間は、私の学部長務めの4年間でもありました。だから個人的にも感慨深く、皆さんの健闘に「ありがとう」の気持ちです。そして今、皆さんに願うことは、大学で学んだことを少しでも糧にして、「福祉社会」づくりをライフワークにしてほしいということです。地域活動、子育て、職場環境の改善、社会的弱者への支援等々、その機会は長い人生のいつでもどこにでもありますから。では皆さん、再会の日までお元気で!

本当の「卒業」

福祉社会学部福祉社会学科担任 尾入 正哲

以前、ある先生が謝恩会の席で卒業生に次のような挨拶をされた。「皆さんは、社会福祉は無条件で良いことだと思っていないだろうか。しかし、はたしてそれは正しいのだろうか」

大学で学んだ人とそうでない人はどこが違うのか。

大きな違いは物事を相対的に捉えられるかどうかではないかと思う。世の中に絶対的に、無条件で良いことや悪いことなど無いのである。

何もできないまま、いつの間にか学生生活が終わったと後悔している人もいるかもしれない。しかし、そんなことはない。大学では自分でも知らないうちに、物事の見かたといった大切なことを学んでいるのである。いつかそれに気づく時がきっと来る。そして、その時が本当の「大学卒業」の日になるのだと思う。

楽しく充実した4年間

福祉社会学部福祉社会学科 Y. F.

4年間はあっという間でしたが、ただ過ぎていっただけではない大変濃い4年間を過ごすことができました。その中でもバスケットボール部で過ごした日々はかけがえのないものです。

理想とする自分像に近づくため

さまざまなことを考え行動してきたわけですが、その結果が「3部昇格」をはじめ、たくさんの形となって表れてくれました。大学生活において「楽しい」だけではなく、このような“充実感”を伴う経験ができたことは大きな財産です。この経験は思い出としてだけ

ではなく、今後私の“支え”ともなってくれると確信しています。

全ての思い出は決してひとりではできませんでした。出会ってくれた先生方、先輩、友人、後輩たちに心から感謝します。4月からは社会人。府大で学んだことを活かし、どんな時も自分を信じ努力していきたいと思います。

よき出会いを

福祉社会学研究科担任 野田 浩資

あつという間の充実した2年間を過ごされたことでしょう。さまざまな分野によって構成されている福祉社会学研究科において、多彩な教員、多士済済の大学院生、また、発想を豊かにしてくれる論文や書籍とのよき出会いがあったことと思います。多様な思考法が共存した環境での経験が、これからの人生において役立つことを願っています。

「複眼的思考法」と表現されますが、多角的な思考法がますます求められます。以前の「常識」が問い直される時代が、当分の間は続くことでしょう。さらなるよき出会いを積み重ねられて、職業人としてのアイデンティティを確立しつつ、柔軟な発想で活躍されるこ

とを期待しております。

拿什么感谢你——福祉社会学研究科！

福祉社会学研究科 E. B.

福祉社会学研究科での2年間は本当にあつという間でした。この2年間、周りの方々-先生、同期のみんな、教務課の皆様-が温かく見守ってくださる中、楽しく過ごすことができました。皆様には、研究だけでなく、就職活動、学校生活など、いつも心配していただきました。特に、修士論文執筆の期間は、先生方の親身な指導のもとで、同期のみんなと執筆生活の楽しさと苦しさを分かち合い、修士論文を完成することができました。皆様、誠に感謝しております。

学業以外の学生生活においても、花見大会、餅つき大会、様々な懇親会、合宿、旅行など、いい思い出がいっぱいです。私は厳しい留学生活の中で、ずっと温かい愛情を感じております。今、一番言いたいのは、真的爱你！——福祉社会学研究科！

人間環境学部・人間環境科学研究科

今をどう生きる

人間環境学部長・人間環境科学研究科長 下村 孝

団塊世代の一員である私が大学を卒業した年に円が切り上げられ、修士課程修了の年には、日本の高度経済成長が終焉を迎えました。そして、博士課程在学中にベトナム戦争終結のラジオニュースを研究室で聞くこととなります。学生として学問に取り組んでいる間に、世界は大きく移り変わりました。時折、その時々私の生き方を思い出して今を考えています。

皆さんが、学部や大学院で勉学や研究に取り組んでいた間に、世界の変動の中でわが国も大きく変わってきました。終身雇用制は崩れ、派遣社員がテレビドラマにも取り上げられています。日本が後追いする格差社会のアメリカで、9.11以降イラク戦費が総額52兆円にもなると報道されています。

さて、今、皆さんはこの世の中をどう生きるのか。

無意識下の意識

食保健学科担任 中村 考志

新入生オリエンテーションでお話したことを最後に

もう一度お話ししたいと思います。4年後の自身のあるべき姿を形作っていくために、勉学に励むことはもちろんのこと、あいさつを完璧にする、人の話をよく聞く姿勢をもち説明能力向上のかたとする、理解できないまま先に進まない、おもいきった挑戦をしてみる。基礎力を結集させて応用する力を確認する場のひとつが卒業論文である。新入生のあなた方には実感もなかったかもしれませんが、言葉として記憶にとどまり無意識下の意識として力になればと願いました。

今日この日の姿のために多くの科目を履修し多くの能力を獲得してきたあなた方はリーダーとなるにふさわしい人材にまで成長を遂げています。京都府立大学の卒業生としてよりよきもののため正しい道を指し示せる人でありつづけてほしいと願います。

卒業を前に・・・

食保健学科 T. T.

大学生活も残り2ヶ月あまり。本当に、この4年間が過ぎるのはあつという間でした。と同時に、いろんな人と関わり、そのなかで多くを学び、自分自身ともじっくり向き合えた、大切な時間だったとも思います。

嬉しい楽しい事ばかりではなく、時にはうまくいかず悔しかったり、悲しくて落ち込むこともありましたが、そこから何かを学び乗り越えられる度に、同じ時間や感情を共有してくれる仲間や家族のありがたさを思い知りました。講義中の先生方の姿、しんどかった卒論、サークルやバイトで出会えた仲間、何気ない話題で笑っていた友達との時間、そのどれもが忘れ難く、他には変えられない思い出です。4年間にあった様々な出来事ひとつひとつが、自分にとって本当に貴重な経験だったのだなと、卒業を前にして、今改めて感じています。

大人になってまた会おう！

環境デザイン学科住環境専攻担任 宗田 好史

昨年の夏、トスカナ州主催の環境の会議に招かれ、ピサで講演しました。20代の頃、留学第一年目を過ごした街です。25年前と同様に、地中海の日差しに白亜の大聖堂と斜塔が輝いていました。

会議後、研究室の友人が、昔の仲間を集めてくれました。これまでも会っているものの、歳とった顔が揃いました。地元テレビに映った私を見た友は、老いた私を笑っていました。

街はすっかりバカンス気分、仕事を忘れ学生気分になりました。とはいっても、安アパートに集まった頃とは違い、お洒落なレストランで料理も贅沢に、話題も環境に限らず、社会経済や政治も1980年代と変わりました。でも、昔の論客は今も同じトーンで語り、返す我々も反論材料も豊富に議論が続きます。帰り際、友が「学生時代の仲間って、何時会っても昨夜分かれたばかりのようにすぐ熱中できる」といったので、皆笑顔で肯きました。

ご卒業される皆さんが、将来こうして楽しい時間を過ごされることを望みます。府立大の4年間は、一生忘れられないほどの輝きをもった時代であり、そこに一生の友がいます。

『本当にありがとうございました。』

環境デザイン学科住環境専攻 H. A.

府大に入学して本当によかったと思います。クラスのような学科の雰囲気も、先生が生徒の顔を覚えてくれる事も他大学ではなかなか味わえなかったと思います。教育面でも少人数ならではの丁寧な指導をして下さり、特に、4回生で

は卒業論文を通じて 自分で考えて取り組んでいく姿勢を身につけさせてもらったと思います。春からは神戸で働きますが、大学時代に学んだことを糧に、そして、社会人として謙虚な気持ちを忘れずに頑張っていきたいと思います。最後に、熱心な指導をくださった先生方、学生生活を楽しませてくれた友人、大学に進学させてくれた両親、親切な大学職員・生協の方々に感謝の気持ちを込めて『本当にありがとうございました。』

いやなことには「いや」と言える人に

環境デザイン学科生活デザイン専攻担任 森 理恵

ご卒業おめでとうございます。三年前にも担任としてみなさんの先輩を送り出しました。今年も同じことばを送ります。<いやなことには「いや」と言える人になってください>。みなさんは、本当にやさしい方々です。とてもよく気がついて、周りのことをちゃんと考えています。でも時にやさしすぎて、私はとても心配になります。相手のことを考える前に、まず自分のことを考えてください。自分を大切にできない人は、本当の意味で他人を大切にすることはできません。かけがえのない自分を、どこまでも大切にしてください。自分の意見をしっかり持つてください。そして、いやなことには「いや」とはっきり言える人になってください。決して無理をしないでください。またどこかでお会いしましょう。

4年間で振り返って

環境デザイン学科生活デザイン専攻 S. K.

私は、府大で過ごす時間が好きでした。アットホームで四季の表情が魅力的で居心地が良かったです。そこで先生、友人、先輩や後輩など多くの人と出会い、狭かった視野を広げることができました。4年間、思い切り走ったりたまに歩いたり、自由で貴重な時間の流れがありました。それは入学前の期待以上に刺激的でした。そして、今の私のかげがえのない財産になっています。

これから先、また新しい出会いや経験が増えていくことが楽しみです。良いときもそうでないときも、等身大の自分を受け入れ、挑戦し続けたいと思います。

最後に、4年間私を支えて下さった方々、ありがとうございました。

「信頼」と「品格」

環境情報学科担任 吉富 康成

卒業おめでとう。皆さんは、「理工系ダブルスペシャリスト」の育成を目指したカリキュラムの一期生です。日本で(世界で?)最初の先進的な学業に励んだことに自信をもって下さい。そして、この場を借りて、皆さんに2つの言葉、「信頼」と「品格」、を大切にしてもらおうをお願いします。「信頼」を人間関係や仕事の中で培うには、普段の精進が必要です。「信頼」を得ることができれば、「自信」につながります。それが、ふとした油断で「過信」に変わると、失言や失敗につながり、「信頼」が一瞬で失われていきます。「信頼」される人になれば、自然と「品格」が備わります。普段の行いが「信頼」の礎になるよう努力して、「品格」の備わった人になって下さい。

大学生活で得たもの

環境情報学科 T. K.

大学入学当初の私の目標は『自分に足りない何かを見つけること』でした。それを探すために勉強、クラブ、バイト、遊びと全てに全力投球しました。特に力を注いだのはクラブ。大学に入ってまでなぜこんなことをしているのか、苦しんでまでやる価値はあるのかと悩んだ時期もありました。しかし、今はそれが私には足りないものだったことがわかります。それは『最後までやり遂げる力』。そのために必要なのは『信頼できる仲間を得ること』。それに気づかせてくれた皆様に感謝したいと思います。そしてこれからも一生懸命頑張って向上していきたいです。

IMAGINE 想像せよ

人間環境科学研究科食環境科学専攻担任 川添 禎浩

修了おめでとうございます。皆さんが、大学院で研究に取り組み、その成果を論文としてまとめ、立派に発表されたことを嬉しく思います。

これまでの広報(卒業特集)をみると、皆さんが生きていく上で、「夢」や「希望」をもつことの大切さを、先生方が述べられていました。私は、さらに、これに「豊かな想像力」をもつことを付け加えたいと思います。「IMAGINE 想像せよ」は、ジョン・レノン/ヨーコ・オノによって有名になった言葉で、これに対して、想像するだけでは何も変わらないと批判する人もいます。しかし、「夢」や「希望」を豊かに想像することは、社会の理不尽な現実に対峙することです。想像した

「夢」や「希望」を実現しようと努力することは、現実を見据えつつそれを超えていこうとする行為です。想像することは人が自由である証であり、想像なきところに人の自由はありません。「IMAGINE 想像せよ」、この言葉を最後に皆さんに贈りたいと思います。

修了を前に思ったこと

人間環境科学研究科食環境科学専攻 T. T.

3回生の2月頃、部活動にピリオドを打ったとき、卒論研究も、将来も、この先どうしたらいいのかわからなかった。部活漬けだった毎日後悔もあった。4回生になり、院に進もうと思った。『自分探し』と言えはかっこいいけど、本当はただ就活が嫌だったのかもしれない。そんな気持ちで受けた院試は不合格だった。でも、その後、先生が英語の特訓をしてくれた。この先生の下で研究を頑張ろうと思った。そして、大学院に入ったが、先生にも、学費や生活費を工面してくれた両親にも申し訳ないくらい研究は進まなかった。毎日お茶を飲みながら先輩や同級生と話し、後輩にちょっかいを出し、学校の外で頑張っていたような気がする。しかし、院2回生ともなると、私自身が成長した。研究も軌道に乗り、将来の道も決まり、部活も大切なものだったと気づくことができた。『ここに来てよかった』と修了を前に思った。みなさん本当にありがとうございました。

府大を巣立つみなさんへ

人間環境科学研究科生活環境科学専攻担任 松原 斎樹

大学院の修了、おめでとうございます。

他大学から入学された方は2年間の、また府大から進学された方は6年間の府大での学生生活を終えて、社会に巣立っていかれるのですね。教員にとっては、うれしくもあり、また寂しくもある時です。

今年は13名の方が修了されますが、皆さんの修士研究は例年にもまして、完成度が高いと思います。それも、「よい研究をしたい」という皆さんの意欲と、その意欲に応えようと努力した教員の熱意とのコラボレーションでした。ご自分の修士研究のレベルに自信を持って、巣立ってください。そして、府大修了生であることに誇りを持って、社会でご活躍下さい。

時々、近況を知らせてくださいね。

府大への感謝の気持ち

人間環境科学研究科生活環境科学専攻
Y. K. (以下:K) & M. S. (以下:S)

- K : 2年間、あつと言う間
やったね。芝は府大のどこ
が好き？
- S : 規模が大きすぎなくて、
一人一人がしっかり指導
してもらえたことかな。
- K : そうやね、こじんまりしてて、生協食堂や購買の
職員さんにも顔覚えてもらえたもんね。でも、閉店
時間が早いのは、2年間慣れへんかったなあ。
- S : ほんまほんま、そういうところは、規模が大きい
方が充実してるよね。でも、図書館の司書さんの対
応が良くて、勉強もはかどったし、やっぱり、こじん
まりしてるほうがいいよ。いやほんま勉強したわ、
この2年間。
- K : ほんま、いい環境の中で勉強させてもらえて、充
実の2年間やったね。
- S : 社会に出ても胸を張って頑張れるような自信が付
いたわ。
- K : せやね、これからも頑張ろうね。

同級生交歓

人間環境学研究科環境情報学専攻担任 椎名 隆

某雑誌に同級生交歓というページがあります。社会の第一線で活躍している著名人を中心に、中学校、高校などの蒼々たる同窓生が集まり、1枚の集合写真とともに学生生活と現在の活躍を紹介している 短い文章です。当たり障りのない、なんと言うこともないページなのですが、私はこのページを読むのが大好きです。「何事にも活動的だったA君は、XX社の企業研究者と

して多くの業績を上げ、現在は国際部長として世界を相手に活躍しているが、学生時代のテニスで忘れられず、数年前にテニスのうんちく本を出版、隠れたベストセラーに」。「研究が三度の飯より好きでいつも研究室にいたB君であるが、10年前に医薬品開発の研究者から突如方向転換、現在陶芸家として銀座で個展を開くまでになった。」「同級生の憧れであったCさんは、医学界に転身、僻地医療にたずさわる」。短い文章の後ろに広がる豊かな個人史を想像するのがおもしろい。皆さんも、人生を積極的に生きて、面白い同級生交歓を描けるといいですね。ちなみに、上記の例は私の大学院時代の同級生の場合です。私については、「大学教授として平凡な日々を送るが、同級生に負けない人生のサプライズを画策している??」。

夢中になること

人間環境科学研究科環境情報学専攻 M. A.

2年前大学院に進学し、新しいテーマの研究を始めました。毎週進捗状況の報告を求められるので、自分の研究について毎日考え毎日実験をしました。研究を進めるうちにわかったことは、やればやるだけ結果が出て先に進むことができ、そのついでに必ず何かしら得るものがあるということです。高校、大学とクラブ活動等には参加していなかった私には、1つのことに集中的に取り組むという経験がほとんどなかったため、これはかなり新鮮でした。このことから、うまくいってもいなくても、続けることで確実に実になるということを知りました。夢中になること、それは何を成し遂げるにあたって、大きな原動力となる、それを知った2年間でした。

農学部・農学研究科

知識の多さより考える力を

農学部長・農学研究科長 石丸 優

ご卒業、ご修了、おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。さて、大学生活はいかがでしたか。多くの方は勉学や研究に充分な力を注がれ、多くの知識を得て社会に出て行かれるものと確信します。しかし、私が社会の様々な分野で活躍されている方々に、大学卒業、修了生に求める能力を尋ねると、異口同音に、自らの知識を総合して考える力、言い換えれば、遭遇した問題に対する解決能力であるとの答えが返って

きます。多くの知識を有していることには十分な意味がありますが、この情報化社会においては、断片的な知識は比較的容易に得られます。今後は、自らの知識を考える力に変えるべく、努力され、実社会で活躍されるよう念じております。

得意技を

農学部附属演習林長 高原 光

ご卒業、心からお祝い申し上げます。私が、皆さんと同じように、京都府立大学を卒業したのは30年近

くも前になります。ついこの間のように思い出されます。これから、社会にでると、様々な経験を積み上げながら、仕事をしていくことになると思いますが、何か、1つ得意技を作ってみてはいかがでしょう。あなたにしかできない、何かを……。あることに打ち込んで、プロフェッショナルになると、どんな仕事にも対処の方法が違ってくるように思います。目の前のことに追われているとすぐに、年をとってしまい、30年はあっという間でした。皆さんのこれからのご活躍、ご健康そして幸せを祈っております。今後は、社会人として京都府立大学を応援してください！

海外旅行の勧め

農学部附属農場長 藤目 幸擴

卒業並びに修了おめでとう。講義でいつも言っていますが、この機会に異文化体験をしてきて下さい。この時期を逃すと、ゆっくり海外に出かける機会はなくなるかもしれません。できれば日本と違う習慣、風土のところへ行き、自分の目でその土地を見ると共に、土地の人と話しをして交流をもって下さい。英語は今までに8年以上も学んできているので、文法は頭に入っているはず。ブローケンで良いから、勇気を出して話してみてください。そうすることによって、日本とその国の違い、日本の良い点・悪い点分かることでしょう。日本の常識が世界の非常識かもしれないことが、実感して分かるかもしれません。

豹変へのチャンス

生物生産科学科担任 吉安 裕

卒業おめでとうございます。これまで、卒業後数年を経て何人かの方が私を訪問され、親しくお話する機会がありましたが、なかには学部生のころと見違えるような、また別の近況を生き生きとした自信に満ちた口調で語られる方にお会いでき、大変驚き、うれしくなることがあります。「君子豹変す」ではありませんが、本当に人は短時間で変わることができるもの、また環境が変わるとこうも変わるのかと実感しています。本人のなかでは少しずつですが、社会あるいは進学後に常に自分を見つめながら、人生を歩まれていることと想像しています。私のように怠惰に歳を重ねている者にとっては豹変された方とお会いするのはとても新鮮です。今年の卒業生のなかにどれだけ目を見張らせる方が出られるのか、楽しみにしています。お体に気をつけて新しい道をしっかり歩んでください。

感謝

生物生産科学科 M. T.

本当に恵まれた環境の中で過ごした4年間だったと、今振り返って強く思います。学生だからこそのできた経験が、私を育ててくれました。中でも大きかったのは、合気道部の存在です。活動を通して多くの人と出会い、人と人とのつながりの大切さを本当の意味で知ることができた気がします。また、本気で意見をぶつけ合い、一緒に笑って泣いた仲間は、学生時代の宝物です。受験が思うようにいかず辛い気持ちを引きずっての入学でしたが、この4年間で何ものにも代えがたい大切なものを手にすることができ、今は京都府立大学を卒業することに誇りをもてます。最後まで丁寧にご指導いただいた先生方、いつも傍で支えてくれていた親や友人に、感謝の気持ちでいっぱいです。この気持ちを忘れずに、また新しい一歩を踏み出したいと思います。

卒業を祝して

森林科学科担任 湊 和也

卒業おめでとうございます。まだ入学式の前に、学生会館で開いた親睦会で諸君と顔を合わせたのが、ついこの間のように思い出されます。近年、生活が豊かになった反面、ストレスが増えてきているのも事実です。軽いストレスを感じた時には、樹を眺め、木の感触を楽しみ、さらに大きいストレスを感じた時には森に入って深呼吸してみる、そんな気持ちのゆとりを持ってみてはどうでしょうか。森林科学科で学んだ知識も何かの役立つことがあると思います。社会では府大の先輩がたくさん活躍していますが、その中には団塊世代と呼ばれ、間もなく定年を迎える人達も大勢います。諸君には、府大の伝統と名声を引き継いでくれることを期待します。

人生の木

森林科学科 S. M.

人生は木のようなと思う。太い幹を伸ばしながらも小さな枝をいくつも作っていく。その枝に葉がつき、つぼみができ、花が咲き、実がなる。その繰り返しだ。

この四年間、私は多くの枝を育てたように思う。大学での研究、クラブ活動、サークル活動、アルバイト。

どうやったら実がなるだろう。自らが問題提起をし、考える事から始まる。育て方は全て違う。正解は用意されていない。それが大学という場だった。毎日が試行錯誤の連続だった。不安に押し潰されそうになった事もあった。そんな時、私を支えてくれたのが先生方、先輩方、家族、そして仲間達だった。お世話になった方々へ心から感謝の意を述べたい。

多くの出会いに感謝しつつ、私はこれからも人生の木をもっともっと大きくしていくつもりである。

クラスメートとしての絆を大切に

生物資源化学科担任 松井 裕

ご卒業おめでとうございます。4年前に胸躍らせて大学に入学して来られて、私が学年担任をすることになりました。思えば4月に新入生歓迎合宿を京都教育文化センターで行い、相互に打ち解け、親交を深める第一歩となりました。翌朝は黒谷から吉田山をハイキングして、わいわいがやがやとそれなりの楽しい思い出深いひとときを過ごした記憶が蘇ってきました。あれからあっという間に4年の歳月が経過したような気がします。今、皆さんを見ると当時の高校生のな雰囲気から善しにつけ悪しきにつけ随分成長され、たくましくなられたように思います。今後は大学院に進む人、社会人として出発つ人とそれぞれ離ればなれになって行きますが、4年間培ったクラスメートという絆は生涯忘れずに、機会あるごとにお互いにコンタクトされて、さらなる友情を温めていただきたいと思います。私も皆さんと一緒に違った意味の卒業をします。短い教員生活の期間でしたが、大変楽しい有意義な人生のひとつこまを皆さんとともに過ごせたことを心より感謝申し上げます。

卒業にあたって

生物資源化学科 S. I.

私は入学時から、環境問題に関心を持つ身として、人間社会と自然環境の調和に役立ちたいという目標があり、その為に何をすべきかを常に模索してきました。残念ながら、本学科の授業ではその具体的な道筋というものは見つけれませんでした。熱心な先生方にご指導いただき、研究を進める手段として、そして理論構築の基礎としての知識を身につけられたことは、大きな財産だと4回生になった今強く感じています。卒業後は、京都大学大学院農学研究科に進学し、微生物を利用した環境に優しいものづくりをコンセプトに研究を進めていき

ます。進路決定は容易ではありませんでしたが、先生方の助言は大いに参考になりました。目標に向けての大きなステップにできるよう、今後も学業に励んでいきたいと思います。

高きに升るには

農学研究科生物生産環境学専攻担任 吉安 裕

大学院修了おめでとうございます。専門知識がどれほど活かされるか、これからが正念場になりますが、「高きに升るには必ず下きよりする」のように、時間はかかりますが、いつも着実な一歩を忘れないように、あきらめないでしっかり足下をかためて、高いところに挑戦していただければ、と願っています。

知識の幅を

農学研究科生物生産環境学専攻 H. K.

修士論文を進めるにあたって、本来の所属先である下鴨の応用昆虫学研究室と同じくらい、精華町の細胞工学研究室にもお世話になりました。普段は下鴨に住んでいるため、片道1時間以上かけて精華町まで通うのは時間的にも肉体的にも辛いものがありましたが、細胞工学研究室でしか学べないことがたくさんありました。必要な知識や研究の進め方などは研究室ごとに異なっていると思います。この2年間は所属先の研究室以外の研究にもふれることができ、知識の幅を広げる非常にいい機会にめぐまれました。また、細胞工学・農業生態の学生や農場技術職員の方と交流する機会もあり、人との出会いという点でも精華町に行かなければ得られないものがたくさんありました。

時間を大切に

農学研究科生物機能学専攻担任 市原 謙一

大学院で送った2年の歳月は、学部4年の半分よりも短く感じたのではないのでしょうか。人は歳をとるにつれて、同じ年月でも短く感じるようになります。私の場合ですと、10代の10年間に比べて20代、30代とその後の10年は20～30%くらいずつ速くすぎてゆきます。現在の私の1年は学生時代の半年にもなりません。これは、時間の長さを記憶する脳細胞が記憶システムが加齢に伴って壊されていくせいではないかと思われ（私の勤ですが）。

いずれにしても、個人差は大いにありますが、みなさんにとってもこれからは、時間がどんどん速く過ぎ

ていくことは間違いありません。1日1日を大切にしてください。活躍を期待しています。

修了を迎えるにあたって

農学研究科生物機能学専攻 K. K.

2年間の大学院生活は本当にあつという間でした。友達、先輩、後輩、先生、家族……多くの人に支えられ、入学当時より少しは成長した今の私があります。切磋琢磨しながら、時には羽を伸ばしたり、相談し合ったりできる方々と巡り合い、人とのつながりの大切さを実感できる本当に充実した毎日でした。

4月からの社会人生活には不安もありますが、大学院生活で得たものを胸に新たなスタートを切りたいと思います。10年後20年後も充実した日々を送っていただけるよう、たくさんの試練を乗り越え、自分を磨き続けたいです。

大学を含めた6年間に会いお世話になったみなさん、本当にありがとうございました！ また6年もの間、勉強する場を与えてくれた両親や家族に感謝の意を表します。

退職教員からのメッセージ

定年退職に際して ●——

文学部史学科 河村 貞枝

これまで定年を迎えられた先生がたや知人をお送りするときに、「おめでとうございます」といふべきかどうか悩みましたが、イギリス滞在中に結婚祝い、誕生祝い等々のカードに混じって、「Happy Retirement」のカードがいっぱい売られているのを見て、「おめでとう」でいいのだと妙に納得しました。信じられないことに(実際我がことになるとそんな感じです)、私自身がその日を迎えることになりました。自分が体験するとなると、やはりどこか淋しいということも一面の事実ですが、「めでたい」ということも、他面の事実だと思いつつあります。定年退職とはいえ、このまま老け込んでしまうつもりはありません。昔、「大きくなったら、何になろうか」と考えたように、これからもいろいろの道を模索し、またやり残した研究に、働けるだけ働きたい所存であります。しかし、もうKPUの人間でなくなるという感慨は予想外に愛惜の情の深いことを痛感し、在職14年間の歳月に、文学部の同僚諸先生は申すに及ばず、本学の数多くの教職員の方々から賜りましたご交誼に対して厚い感謝を申し上げたいと存じます。そして今後ともどうぞ変わらぬご指導をお願いいたします。

おわりに臨み、一言。わが国では、大学におけるジェンダー・フリーは自明のこのように見えるし、雇用差別は消滅していると言われるけれど、これは今後もととりわけ女性たち自身が研究・教育両面でたゆまない努力と発言を続けていかないと、容易に逆行するかもしれない危ういものと、私は感じております。本学が真の男女共同参画の社会であり続けますように、祈念してやみません。

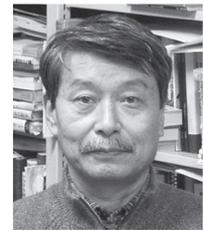


時代の流れと学問 ●——

文学部国際文化学科 赤阪 賢

府立大を訪問したさい南門から入ったので、初春のやわらかな日差しに木々の緑が映え、小鳥のさえずりまでが迎えてくれる気分がして、のどかなキャンパス風景に好感をもったことを思い出している。10年間すごした大学を去ることになったが、じつは近隣の大学に勤務する文化人類学の仲間が数人、今年いっせいに停年退職をむかえる。つまり、この世代は戦後日本が一種の閉塞状態にあったころ、ヒマラヤ、インカ、ニューギニア、アフリカなど海外の探検にあこがれた体験を共有していたのである。そのあげく人文地理学、農林生物学、薬学などの専門から脱線し、文化人類学なるあやしげな学問に転進する破目になった。ほとんど独学で勉強したキャリアしかもたないまま、大学に籍を置いて好き勝手な道にいそしむことができたのはまことに幸運(悪運?)なことだった。どうやら、いわば混乱期の落とし子というべきで、現在の大学を困む状況では想像しえないことだろう。

本学に移ってきたのは国際文化学科の創設に加わるためだった。前任校では文化人類学コース主任として、痩せても枯れても一国一城の主だったので、大講座制の一員であることになじむには少々時間がかかった。なによりも、学生との距離がはなれてしまい淋しい思いもしたが、これには都会と地方大学の学生のあいだの気質の相違も反映していたかもしれない。あらためて国際文化論に取り組むことに汲々としてしまい、専門のアフリカについて語る機会も減ったきらいがある。最後になって、卒業後に他大学や本学の修士課程でアフリカ調査に従事する大学院生を輩出したことが唯一



のなぐさめである。人間環境学部の先生に科研調査でマリ共和国まで同行していただいたのも貴重な体験だった。文化人類学や国際文化学が語ってきたのは多角的な視野で世界を見ることで、その重要性がいや増しつつある今、持場をはなれるのは不安でもあるが、老兵は去るのみということか。

府立大学での14年間 ●

人間環境学部食保健学科 中坊 幸弘

私は平成5年(1993年)に京都府立大学に採用されました。当初は地下鉄北山駅で降りて、付属農場の門を入り果樹や農作物の育つ様子、水路の流れなどを楽しみながら研究室へ向かっていました。水田に水が張られると蛙が鳴きだし、合鴨が飼われている年もありました。行き帰りのこの時間は、大学と私生活を切り替える大切な時間帯となっていました。その後、精華農場ができたため下鴨農場が縮小されて農場の門は閉じられたのを機に北大路駅に変えて鴨川の四季を楽しんでいます。そのささやかな楽しみも終わります。



赴任早々、開学100周年にともなう記念事業の計画が始まりました。学術財団設立基金を募るため先生方が手分けして企業廻りをする募金活動も開始されましたが、平成7年1月の阪神淡路大震災に遭遇することとなりました。卒業生の名簿を頼りに会社の総務部を尋ねて寄付をお願いするという貴重な体験をしました。あまり思い出したくない事柄ですが訪問した会社の前を通る度に当時の状況がよみがえって来ます。

生活科学部から人間環境学部への改組と大学院博士後期課程の設置は、京都府立大学の歴史にあらたなページを加えました。文部科学省への申請書類は膨大なもので、教職員が夜遅くまで作業して綴じた書類をお揃いの手提げ紙袋に詰めて10人近くで直接持参したことを懐かしく思い出します。大学院博士課程の設置には、担当教員の業績審査がおこなわれ、各専攻毎に一定数の教員配置が求められる厳しい審査が課されています。そのため、審査に合格する教員を集めて博士課程を申請しなければならない大学もあるなかで、新たな増員もせず設置が認可された事実は、京都府立大学の先生方が活発な研究活動を行う優秀な集団であったことを証明するものでした。食保健学科では、管理栄養士養成施設として、また栄養教諭の教職課程も認可され今後の発展が期待される所です。

たまたま居合わせた京都府立大学での14年間は、先輩、同僚の先生方、そして優秀な学生達、職員の方々のお陰で充実した大学生活となりました。心からお礼

申し上げます。

MOVE ON ●

人間環境学部食保健学科 南出 隆久

大変お世話になりました。

本学での大学生生活を振り返ってみるとこの20年間は、長いようであっという間の出来事のように思えます。正に先人曰く、「光陰矢のごとし」でした。



いまは、日々の教育・研究活動を何とか無事に終えたことに安堵の念を隠せません。振り返ってみると、大学を去るにあたり心残りなことが3つあります。

その1つは、みなさんから「活性酸素(自称かもしれません)」と揶揄されるように、この間学内外を動き回りじっくりと自分の席で勉強をしていなかったことです。大変申し訳ありませんでした。お許し下さい。しかし、このことはこれからの私の生活のあり方にとって大変プラスになりました。

2つ目は、栄養士養成に従事するなかで、本学を卒業した多くの立派な栄養士を各方面に輩出できましたが、発展途上国で活躍してくれる卒業生を一人も育てることができなかったことです。これは今後に期待しましょう。

3つ目は、顧問をしていた応援団と体操部を元気にできなかったことです。特に大学の顔である応援団は全国的にも部員確保が困難であると聞いていますが、本学も同じ状況のなかで団の中心となる団旗を担う学生がここ数年いないことです。大学の団旗は、他大学との交流の場でその大学の精神(スピリット)を対外的に誇示し、試合に参加する選手諸君を心身共に奮起させる大切なものなのですが、眠ったままです。できるだけ早く、団旗が青空に翻るのを待っています。

最後になりましたが、大学間の競争が激化するなかで本学が益々発展されることを祈念しております。

“下鴨”の発展を ●

農学研究科生物機能学専攻 井上 雅好

16年間の京都府立大学での生活でした。この間、院生・学生、教職員の方々に支えられながらの毎日、皆さんに感謝いたします。

春は桜、少し遅れての花水木。北大路橋西詰から大学方向の桜は絶景で、蹴上方向の遠望もまた見事なもので、それに続く資料館周辺の花水木にもずいぶ



んと楽しませてくれました。夏は、暑い盛りの木蔭での息抜きや、夕暮れの賀茂川や北山からの涼風。秋は、モミジ・イチョウ・ナンキンハゼの紅葉と落葉。冬は、北風と時には雪。雪を冠った比叡山から大文字山・東山一帯へ続く眺めは別格で、寒風の中で見とれることもしばしばでした。下鴨のこの地で季節の移ろふ様と歳事を堪能させてもらった年月でもありました。

しかし、赴任当時には、いろいろな途惑いや見当違いがありました。いわゆる“講座制”を基本にした大学の時代に学生生活を過ごし、教員として大学紛争を経験した後、20年近く大学から遠ざかってからの着任でした。大学は大きく様変わりしていました。途中で聞いたり感じたりして自分なりにつくりあげていた大学のイメージではありましたが、それと現実とのギャップは大きく、大学の地盤低下を感じながらのスタートでした。その時に感じたもう一つの事柄があります。府立大の学生は、優秀であり、また、熱心に努力するものの、学外へ積極的に目を向けていないのではないかとの印象でした。その意味で、これらの好転に向けていろいろと試みてきた16年間でもありました。しかし、その結果は？と問われると、答は定かではありません。ただ、卒業生がそれぞれの分野で活躍してくれている事を考えると少し安心できるかとも思っています。

また、植物での巾広い放射線の生物効果の分析を研究テーマとして持ち続けている小生にとって、着任当時から関わってきたイオンビームの生物効果がかなり明確になってきたことや植物育種への利用の道が開けてきたことは、一つの区切りをつけられたものと喜んでます。

京都府立大学は、今、決定的とも言える大きな転換期に至っています。大学としてキリリとした品位を維持した今後の発展を期待しながら、お別れします。

大学雑感 ●

農学研究科生物機能学専攻 石丸 優

私が京都府立大学に移ったのは平成元年4月、以来18年間府立大学にお世話になり、この4月に停年退職いたします。大学の教員になってから39年、総じて研究は面白かったといえ、また、指導した学生が見違えるように実力を付けてくれたときには、大きな喜びを感じました。

さて、私が大学教員になって間もなく、いわゆる大学紛争がありました。当時は、「産・学協同」は大学人にとっては無条件で悪であると考えられていました。しかし現在、「産・学・官連携」あるいは公立大学では



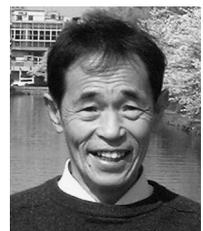
「産・学・公連携」の推進が、これもほぼ無条件に、大学人のなすべきこととの風潮が社会通念となっているように思います。どちらの「考え」、あるいは「感覚」の方が正しいかを議論すること自体ナンセンスだと考えます。むしろ、どちらか一方に極端に偏ってしまうこと、さらには、それを要求する社会的風潮が過度に高まるのが問題と考えます。そうした意味で、現在の風潮には少なからぬ危惧の念を抱いています。当然ながら、大学は象牙の塔であるべきであると主張するわけではありません。大学における研究は公のお金を使って行われています。したがって、その成果は何らかの形で社会に還元しなければなりません。大学教員の大多数は自らの研究成果が社会に何らかの形で寄与することは喜びと考えているはずですが、研究成果の還元があまりにも短期的なスパンで要求されたり、場当たりの成果ばかりが要求されたりすれば、我が国の将来に大きな禍根を残すことになる恐れがあります。長期的展望に立脚した研究や、短期的にはあまり成果が期待できない研究、さらには、当面何に役立つかわからない研究、そうした多様な研究から応用範囲の広い成果が生み出されることは歴史が示しています。研究の多様性を許す社会的成熟を今後の大学を取り巻く社会に期待して、府立大学を去ります。

最後に、本学在職中には様々な方にお世話になりました。深く感謝いたします。有難うございました。

“ありがとう” ●

農学研究科生物機能学専攻 飯田 生穂

府立大学に助手として勤め始めたのが1967年(昭和42年4月)であったので、結局、最初から最後まで府立大学に世話になったことになる。この間を振り返ると、府立大学も建物や建物を取り巻く環境、人柄は、大きく変わったような気がする。



初期の頃の大学入試は、いつも30~40倍で、全国でも1、2の競争率をほこる学校であった。建物は、本館をはじめとして多くが木造の平屋建てで、構内には床屋もあった。また、大学紛争も経験した。こんな中で親睦会として全学的な「助手会」、「助、講会」があり、忘年会か、或いは新年会が毎年催され、わいわい騒いでいたことを思いだす。古くは、コンピューターもない時代で、ゆったりとした時間を過ごすことができた反面、卒論の提出時期になると、寝泊まりして専攻生と一緒にすごした懐かしいときもあった。その頃の学生が、昨今では社長職や取締役をへて「定年退職しました」という挨拶状や訪問をうけるので、自分自

身の定年を考えたとき遅きのかんもある。いつもながら府立大学の学生は、優秀で、努力家だと心から思っている。そんな中に長い間いることができたことは、幸せであったと言える。

過去十数年前までは、公人が一企業のために尽くすのはよくないという時代であった。それが今では産官学で積極的にやることをよしとしてきている。世は驚くほどのスピードで変化している。また、すべてをさらけ出し、考えを聞いてもらい得意になって議論したのと比較して、今は学会発表すら特許申請するまで発表しないといった風潮も見られる時代である。速度も速くなり、かなり忙しい時代である。結果として、人々は多く疲れていないであろうか？

我々の専門領域も「環境」をキーワードに大きく改革が進んでいる。人の生命にかかわる「環境」は、重要な研究課題である。しかし、若い新鮮な頭脳が多く育っている。専門領域の将来が楽しみである。最後に、スタッフ、卒業生、在校生、長い間、本当にありがとう。

お世話になりました ●——

農学研究科生物機能学専攻 松井 裕

この度、晴れて定年退職することになりました。この「晴れて」という意味はよくまあこの歳まで無事に生きながらえてやってきたものだという感慨と、もう一つは企業を定年直前で辞めて本学に受け入れていただき、定年を先延ばししてきましたが、いよいよ年貢の収め時という思いからです。この機会に大学を去るに当たって私の感じた大学への思いを述べさせていただきます。

企業と大学での生活・活動を比較して感じることは、当たり前のことですが、効率性、コスト視点がすべて



の企業と時間をかけて重厚に教育・研究に没頭しようとする大学の風土とは異質のもので。でも今大学が社会から批判の目で見られているのは効率性やコストパフォーマンスが悪いからだめなのではなくて、大学としての重み(存在感)、活力が失われてきているからだと思います。それは教員一人一人の重み、活力でもあります。自分の学生時代を振り返ると偏見かも知れませんが、今よりは大学には重み、活力があったような気がします。その重みは自分には欠けているので、私が本学に来たことはその重みを軽くする一端を担ったと反省しています。それはそうとして、重みを維持し、活力を高めるにはヒト、モノ、カネが不足していて、十分な研究もできず、そうかといって教育にも専念できず(これは私のことですが)、悪循環に陥っていることも一因でしょう。でもヒト、モノ、カネの不足・不備を嘆いてばかりいても現状打開はできないので、平成20年度から発足する法人化をテコに、10年先を見据えた京都府立大学のグランドデザインを再構築する必要があります。今が一番良いのではなくて、また小手先の変革ではなくて、中味のある大学変革が求められます。必ずしも変革のすべてが世の中の動き、ニーズに囚われる必要はないのですが、余りにも固定的、固執的な学科構成、運営を延々と続ける愚は避けるべきだと思います。一部は残しつつも、絶えず一部は改変する弾力ある組織運営が求められます。それぞれの学科の領域、編成を大幅に変えるという意味ではなくて、その領域の中に社会的ニーズに応えうる活路が必ずあるはず。そしてそこにそれらに応えうるふさわしい人材を登用することです。生意気なことを書きましたが、去る者の独り言として受け流しておいてください。

長いようでもあり、また短いようでもありましたが、教員という立場を経験させていただき、また、いろいろな方と巡り会い、私にとっては大変楽しい思い出深い大学生活でした。心よりお礼申し上げます。京都府立大学の益々のご発展と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

人間環境学部の近藤誠造先生が退職されます。長年ありがとうございました。

■桜楓講座(春の部)参加者募集

春の公開講座のお知らせ

どなたでも参加できる公開講座です。春の部は2講座、福祉社会学部と農学研究科から以下のテーマで開講。応募は5月2日(水)までにe-mail、FAX、往復ハガキいずれかで参加コース・お名前・御住所をお知らせください。詳しくはホームページでも御覧いただけます。

(庶務課 TEL.075-703-5102 FAX.075-703-5149 e-mail kikacho@kpu.ac.jp)

Aコース 5/26(土) 「地域における児童虐待防止を進めるために」

(福祉社会学部・教授) 津崎 哲雄

Bコース 6/9(土) 「太ることは悪いこと?—ヒトはなぜ太るのか、

肥満の分子メカニズムと生理的意義を探る—」

(農学研究科・教授) 金本 龍平

西安交換教員からのメッセージ

京都の魅力

文学部国文学・中国文学専攻 張 忠鋒

時間が立つのは速いもので、京都府立大学の任期もあとわずかです。今、この一年近くのことをふりかえてみると、いろいろな思い出をつくることができ、私にとっては、本当に忘れがたい貴重な一年になると思います。

実は、私が京都にお世話になるのは今回2回目です。2002年の3月まで、同じ京都にある大谷大学東洋文化コース博士課程の学生として、奈良から通いながら京都で生活をしたことがあります。ただ、その時は、家を奈良に構え、毎日のように、近鉄に乗り、地下鉄に乗り、家と大学を往復するという生活でした。京都のことを知るどころか、府立大学と大谷大学とは近隣同士であることさえ知りませんでした。京都で3年間の学生生活を送ったものの、京都のことはあまり知らなかったのも、たいへん申し訳なく思いました。何かの御縁で、昨年4月から1年間、京都府立大学で中国語を教える機会を頂いて、再びここ京都で生活することができるようになりました。これは、私にとって、実に嬉しいことでした。今回は、生活の場も、仕事の場も京都に集中しているので、京都を再認識する絶好のチャンスではないかと思ったのです。おかげさまで、京都に来てからの一年近くの生活は、本当に充実したものになりました。よそものに扱わずに府立大学の一員という思いを抱かせてくださった文学部の先生をはじめ、府立大学の先生方に感謝する気持ちでいっぱいです。教えるというよりも教えられることの多い私は、このまま、ずっと京都にいたいなあと思つづくと思っています。完全に京都のとりこになってしまったのです。



私が京都に惚れこんだ理由は、もう一つあります。それは、時空を超え、現代と古代、人工と自然が巧みに調和している京都の町づくりです。初春の桜、晩秋の紅葉。京都の自然は最高のものです。それに、京都の悠久の歴史を物語るかのように、至るところに目に入る数え切れないほどの文化遺跡。さすが1200年の歴史を誇る文化と学問の町だけあって、京都は本当に何とも言いえない魅力に溢れる知的な町です。何より、町の中心を南北に流れている鴨川は、とても印象的です。この鴨川こそ、京都の風情を作り出す重要な存在ではないかと、毎日のように、鴨川に沿って、自転車を走らせ、川の流れる水の音を聞きながら、兩岸の景観を満喫させていただいています。

1200年ほど前、ここ京都に置かれていた平安京は、私の生まれ育った西安の前身である長安を手本にして作られたといわれています。そういう意味で、今の京都と西安は、似通っている部分があると思います。しかし、経済発展をすべてに優先させる中国の国情を背景に、西部開発の最先端に立っている西安は、経済効率に重点をおいた都市開発づくりを容赦なく要求されています。これは、800万を超えた西安市民の生活にかかわる問題ですし、西安の将来にもかかわる問題でもあります。ですから、経済発展を図りながら、如何に古都という名に相応しい歴史文化景観を保っていくかということは、西安の抱えている最も重要な課題となっています。これを思うと、逆に、1200年経った今、西安は京都に学ぶべきところがたくさんあるのではないかと切実に思っています。

数えてみれば、京都での生活も、後1ヶ月ぐらいになってしまいました。名残惜しい気持ちが抑えきれないほどです。この残りわずかな時間を大切に、引き続き、京都の良さを発見しよう、そして、西安に戻ったら、京都の人々の優しさ、歴史や文化を大事にする心を、より多くの西安市民に分かってもらえるように努力したいと思っています。最後になりますが、陝西省と京都府との友好交流の一環として、西安外国語大学と京都府立大学との交流を着実に進めて行くことを心から願っています。

京都府立大学の大学改革の取組

～大学改革を通じて教育・研究や運営体制の充実を図ります～

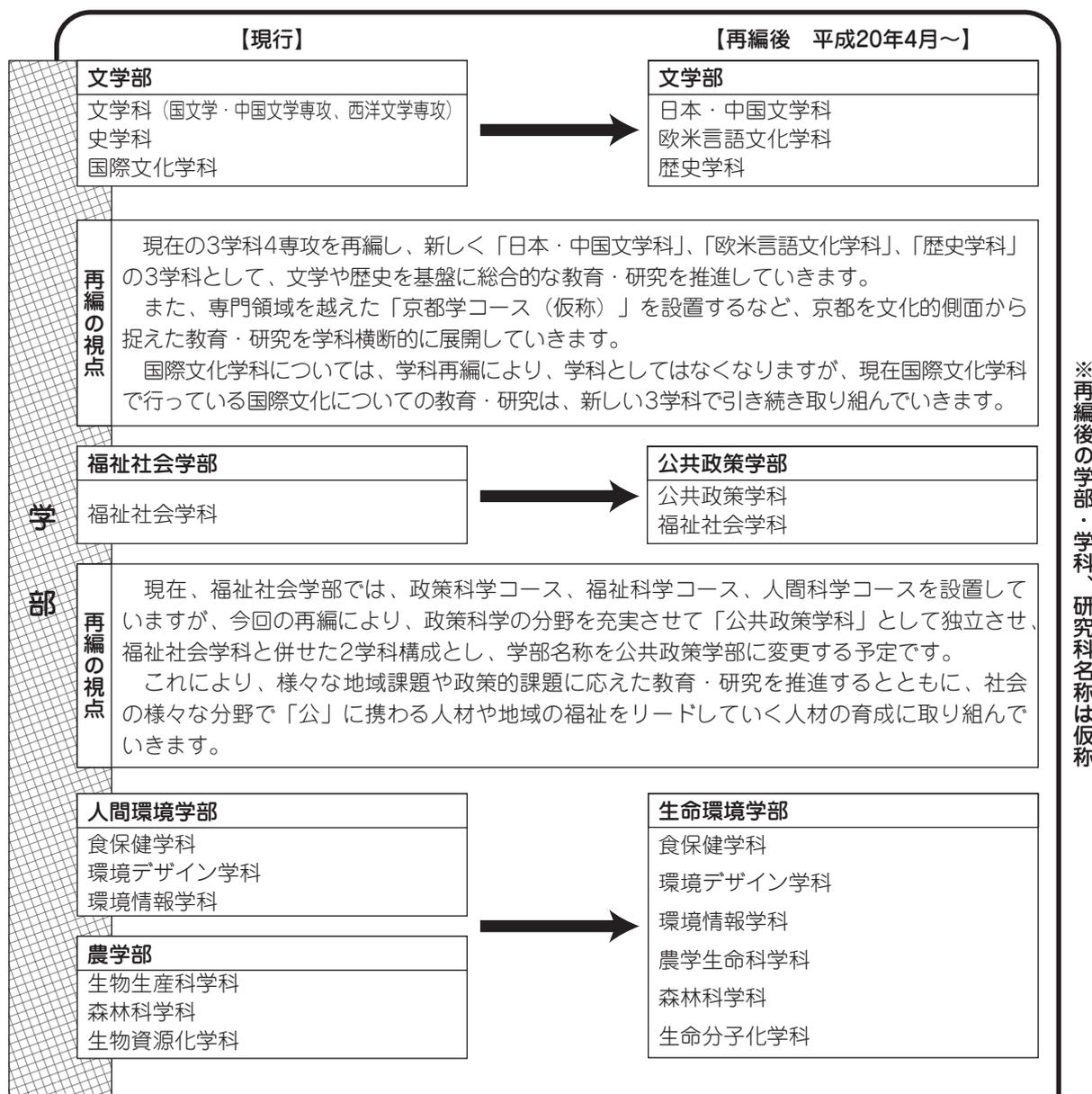
大学を取り巻く環境が大きく変化する中、京都府、京都府立大学及び京都府立医科大学は、平成13年度から大学改革について検討を重ね、昨年12月に「京都府大学改革基本計画」を取りまとめました。

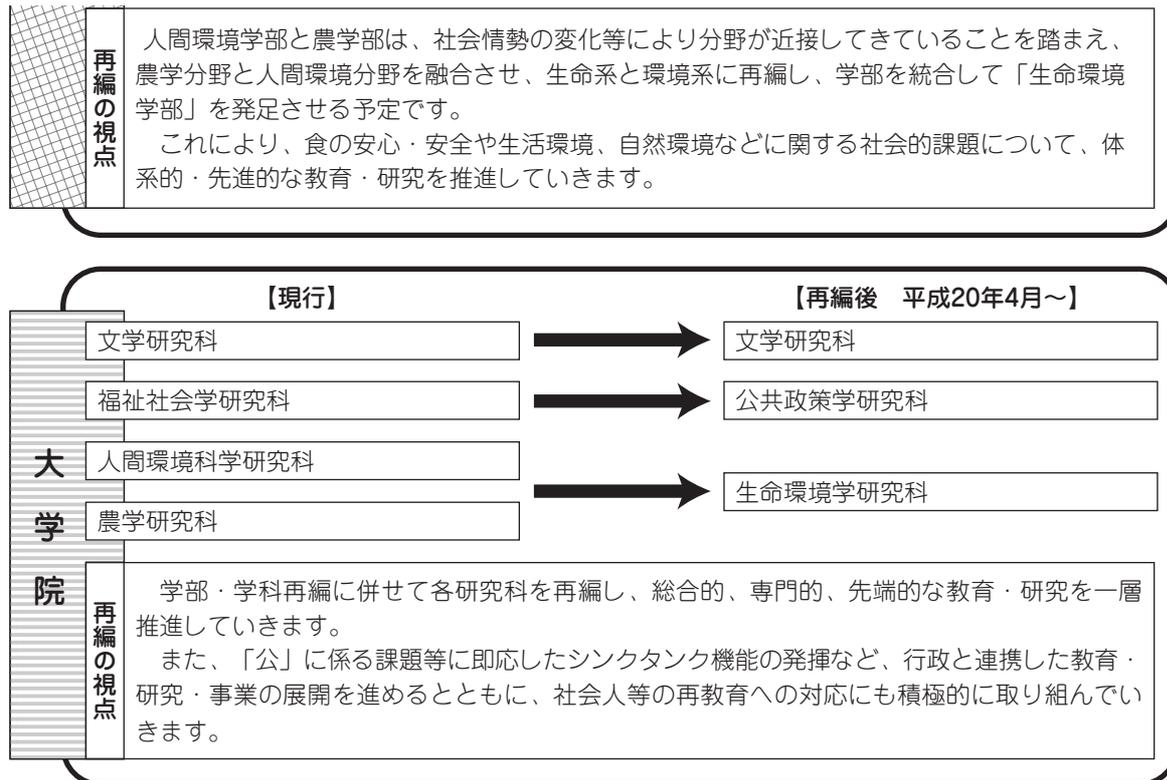
京都府立大学では、この「基本計画」に基づき、平成20年4月を目途に学部・学科、大学院の再編、公立大学法人化など、教育・研究の内容や組織・運営体制の見直しを進め、一層教育・研究の質の向上に努めるとともに、社会や地域に貢献できる大学を目指してまいりますので、引き続き皆様の御支援をお願いします。



1 学部・学科、大学院を再編し、総合的な教育・研究を推進します（平成20年4月予定）

平成20年4月を目途に学部・学科、大学院を再編し、多様化・複雑化する社会の課題に対応できる総合的で専門的・先端的な教育・研究を推進していきます。





2 公立大学法人制度を導入し、組織・運営基盤の強化を図ります（平成20年4月予定）

京都府では、平成20年4月を目途に公立大学法人制度を導入し、京都府立大学は京都府立医科大学との1法人2大学の形態で運営されることとなります。これにより、大学の予算・人事・財務等の自由度の拡大や責任体制の明確化など、組織・運営基盤の強化を図り、100年を超える伝統と実績を生かしながら、社会の変化や地域の課題に対応した特色ある教育・研究を展開していきます。

なお、公立大学法人となっても、京都府からはこれまでどおり財政面を中心に、大学が着実に運営できるよう支援を受けることになります。

平成18年度では、全国の76公立大学のうち23大学が公立大学法人制度によって運営されており、平成19年度には36大学に増える見込みです。

3 京都府立医科大学、京都工芸繊維大学との3大学連携を推進します

京都府立大学は京都府立医科大学、京都工芸繊維大学と連携し、教養教育の共同化をはじめ、専門教育や研究分野における協力の推進など、3大学が持つ特色や強みを生かした教育・研究を深めるとともに、地域への貢献を果たしていきます。



4 生涯教育・社会人教育、地域・行政課題に対応した機能の充実を図ります

生涯教育・社会人教育の充実、地域・行政課題に対応できる機能の

充実・強化など、社会の変化や府民のニーズを踏まえた教育・研究の推進に取り組むとともに、大学の施設等教育研究環境の整備などを進めていきます。

大学改革に関するお問い合わせは…

京都府立大学 庶務課 改革推進室

電話：075-703-5147 FAX:075-703-5149

e-mail：kaikaku@kpu.ac.jp

学位取得者一覧

■課程博士

【文学研究科 史学専攻】

・藤田 和敏 近世郷村結合の研究

【文学研究科 英語英米文学専攻】

・杉村 醇子 トマス・ハーディの後期小説の研究—家族関係と遺伝思想に見られる悲劇性—

【文学研究科 史学専攻】

・庄 佩珍 神国思想に関する研究 —豊臣政権期まで—

【文学研究科 国文学中国文学専攻】

・中村 綾 岡嶋冠山とその周辺 —日本近世文学と中国白話小説—

【福祉社会学研究科 福祉社会学専攻】

・山口 真里 ソーシャルワーク実践におけるストレンクス-パワー変容過程の構築 —利用者のストレンクス-パワー変容に焦点化した支援過程展開の考察—

【人間環境科学研究科 食環境科学専攻】

・児玉 智章 糖質の選択的摂食調節に関する研究

・井上美佐子 Identification of food-derived peptide using human blood and brush border membrane vesicle mode (ヒト血中および小腸刷子縁膜小胞モデルを用いた食事由来ペプチドの同定)

【人間環境科学研究科 生活環境科学専攻】

・黒光 貴峰 高等学校教育における住環境・地域の教授法に関する研究 —住み方演習教材の開発、および地域との連携に関する教材化の検討—

・岡田 準人 戸建て住宅における立面緑化の利用実態と利用技術に関する研究

・長友 大幸 住居系市街地に現存する巨樹の実態と保護意識に関する研究

【人間環境科学研究科 環境情報学専攻】

・野添 幹雄 葉緑体形質転換法を用いた葉緑体遺伝子転写機構の解析

【農学研究科 生物生産環境学専攻】

・MUTITA PINSUNTORN タイの農村ツーリズム組織の形成原理 —農村社会開発組織を事例にして—

・松村 篤 Studies on ecophysiological aspects and axenic culture of arbuscular mycorrhizal fungi for constructing sustainable fruit growing(持続型果樹栽培の構築のためのアーバスキュラー菌根菌の生理生態学的見解並びに純粋培養に関する研究)

・堀井 幸江 Studies on signal compounds related to arbuscular mycorrhizal symbiosis (アーバスキュラー菌根共生に関するシグナル物質に関する研究)

■論文博士

【人間環境科学研究科】

・佐藤 典子 食品加工中に生じる可溶性および不溶性難消化性ペプチドに関する研究

【農学研究科】

・橋詰 利治 スイカ(Citrullus lanatus)におけるDNAマーカーの開発と利用、並びに野生スイカの育種素材としての利用に関する研究

・桑田 光作 Studies on the Utilization of Seaweeds for Sustainable Fruit Growing Using Arbuscular Mycorrhizal Fungi (アーバスキュラー菌根菌を活用した持続型果樹栽培における海藻の利用に関する研究)

・南山 泰宏 トウガラシ *Capsicum annuum* におけるDNAマーカーの開発と利用に関する研究

・古谷 規行 外被タンパク質遺伝子を用いたモザイク病抵抗性タイズの育成に関する研究

・古川 幸子 Influence of rice proteins on the quality of sake in brewing process (清酒醸造における原料米タンパク質の酒質への関与)

・島岡 恵 Studies on Purine Nucleosides Production in *Escherichia coli* (*Escherichia coli*のプリンヌクレオシド生産に関する研究)

■大学ホームページは情報の宝庫です！

京都府立大学広報委員会
情報処理委員会ホームページ管理部会

昨年12月、本学のホームページが「全国大学サイト・ユーザビリティ調査」(日経BPコンサルティング実施)において全国の大学中10位と評価されました。これは単なる見た目だけでなく、ユーザーの使いやすさに関する様々な規格(アクセシビリティなど)をどれだけ満たしているかによって採点されており、本学のホームページが客観的に高く評価された意味で快挙です。

ホームページは昨年4月のリニューアル以降も、より使い易い環境への改善が随時行われ、新しいニュースや学科ページも次々とアップされています。12月には英語版のページも公開されました。いずれも学内の教職員がそれぞれ直接発信しているもので、まさに新鮮な情報の宝庫と言っていいでしょう。

大学ホームページには、一般の方への情報提供や大学改革の動きなどが、今後も順次発信されていきますので、卒業後もぜひ母校のホームページを御覧ください。

URL: <http://www.kpu.ac.jp/>

